

メッセージアウトライン 創世記42:1～38「兄たちとの再会」

ヨセフはエジプトの王ファラオの夢を解き明かした結果、ファラオによってエジプト第二の位に任じられた。すべては彼とともにいてくださり、守り、導いてくださった神の恵みのゆえであった。ファラオが見た夢は主なる神がこれからエジプトになされようとすることを示されたもので、それは七年間の大豊作とそれに続く七年間の大飢饉のことであった。ヨセフはエジプト中を巡り、豊作の七年の間に非常に多くの穀物を町々に貯えた。そして豊作の七年が終わり、ついに飢饉の七年が始まった。そのため、当時の世界中（たぶん地中海周辺の国々やメソポタミア地方、アラビアなど）が穀物を買うためにエジプトのヨセフのところに来て来た。

[1-3]「ヤコブはエジプトに穀物があることを知って、息子たちに言った。『おまえたちは、なぜ互いに顔を見合わせているのか。』さらに言った。『今、私はエジプトに穀物があると聞いた。おまえたちは下って行って、そこから私たちのために穀物を買ってきなさい。そうすれば、私たちは生き延び、死なずにすむだろう。』そこで、ヨセフの十人の兄弟は、穀物を買うためにエジプトに下って行った」

兄弟たちもエジプトに穀物があることを聞きながら、なお何か他に方法はないかと考え、話し合っていたのであろう。しかし、父親の鶴の一声でエジプト行きが決まる。十人も兄弟たちを行かせたのは、人数が多ければそれだけ、食料を多く持って帰って来れるからであろう。

[4]「しかし、ヤコブはヨセフの弟ベニヤミンを兄弟たちと一緒に送らなかった。わざわざ彼に降りかかるといけないと思ったからである」

ベニヤミンはヨセフと同じ母ラケルから生まれた弟であり、ヤコブはヨセフがいなくなってからは、このベニヤミンを特に可愛がっていたのであろう。それゆえヤコブはもしものことを考えて、彼を兄たちと一緒にには行かせなかったのである。

[5]「こうしてイスラエルの息子たちは、人々に混じって、穀物を買いにやって来た。カナンのに飢饉が起こったからである」

ここは彼らと同じようにエジプトに行く人々がかなりの数に上っていたことを示している。どの地域、どの国々の人々であっても、生きる方法が他になかったので、エジプトへ食料を買に行くということは特別なことではなかったのである。

[6] この時、ヨセフはエジプトの権力者であり、すべての人々に穀物を売る者となっていた。そこにやって来たのがヨセフの兄弟たちであった。もちろん世界各

国からやって来るすべての人々にヨセフが直接対応していたのではないだろう。しかし、神の摂理のもと、兄弟たちがやって来た時にはちょうどそこにヨセフが最高責任者としていたのであろう。「ヨセフの兄弟たちはやって来て、顔を地につけて彼を伏し拝んだ」

[7-9] ヨセフは兄弟たちを見て、それと分かった。すでに彼らによって奴隷として売られてから二十年がたっていたが、その年月も何の妨げにならなかった。しかし、彼らには目の前にいるエジプトの権力者がヨセフであるとは全く分からなかった。エジプト独特のきらびやかな衣装を身に着けて流暢なエジプト語を話す権力者としてしか分からなかったであろう。ヨセフは彼らに対して見知らぬ者のようにふるまい、わざと荒々しいことばで彼らに「おまえたちはどこから来たのか」と言った（もちろん通訳を介してのことである）。彼らは「カナンの地から食料を買いに参りました」と答えた。ヨセフはかつて彼らについて見た夢を思い出した。→創世記37:7

彼が十七歳の時に見た夢がこのような形で実現したのである。ヨセフ自身もこのようにして彼の夢が現実のものとなったことを驚いたことであろうが、すべては神のみこころのうちに起こってきたことなのである。さらにヨセフはエジプトの権力者として彼らに「おまえたちは回し者だ。この国の隙をうかがいに来たのだろうか」と問い詰めた。

[10-12] スパイ扱いされた彼らは必死になって自分たちは食料を買いに来たのであること、同じ一人の人の子で正直者でスパイなどではないということを必死になって弁明した。しかし、ヨセフは頑として譲らず、彼らをスパイ呼ばわりし続けた。これは、さらに彼らから情報を引き出すためであったのであろう。

[13] それで彼らは自分たちのことについてさらに弁明する。「しもべどもは十二人兄弟で、カナンの地にいる一人の人の子でございます。末の弟は今、父と一緒にいますが、もう一人はいなくなりました」

[14-15] ヨセフはそれでも彼らをスパイ呼ばわりし、一つの条件を出す。「次のことで、おまえたちを試そう。ファラオのいのちにかけて言うが、おまえたちの末の弟がここに来ないかぎり、おまえたちは決してここから出ることはできない」(15) このような要求をしたのは、同じ母ラケルから生まれたベニヤミンに早く会いたいということと、この件に関して彼らの誠実さをはかるためであっただろう。

[16] それでヨセフは彼らのうち一人が戻って行って、弟を連れて来るまでは彼らを監禁しておくことを申し渡した。もし弟を連れてこなかったなら、彼らはやはりスパイということになる。

[17] 「こうしてヨセフは三日間、彼らを監獄に入れておいた」

これはヨセフが彼らからかつて受けた仕打ちの報復の意味があったのかもしれ

ない。この間に彼らは誰が戻って行って弟ベニヤミンを連れて来るかということ、父をどのように説得するかというようなことを話し合い、結局、結論が出なかったのではないだろうか。

[18-20] 三日目にヨセフは新しい条件を出した。それは彼らの中の一人を監獄に残して、あとの九人は穀物を家族のもとへ持って帰り、そして末の弟を連れて来るようにというものであった。

「そうすれば、おまえたちのことばが本当だということが分かり、おまえたちが死ぬことはない」(20) そこで彼らはその条件を受け入れることにした。

[21]「彼らはたがいに言った。『まったく、われわれは弟のことで罰を受けているのだ。あれが、あわれみを求めたとき、その心の苦しみを見ながら、聞き入れなかった。それで、われわれはこんな苦しみにあっているのだ。』」

彼らは監禁が三日間で終わることを知らなかったであろうから、監獄での苦しみは深刻なものであっただろう。スパイ扱いは彼らにとっていわれの無いことで、しかし、そのような理不尽を経験したがゆえに、彼らはかつてのヨセフに対する自分たちの不当な仕打ちを思い出して、それゆえの痛みを強く感じたのであった。

[22]「ルベンが言った。『わたしはあの子に罪を犯すなど言ったではないか。それなのに、おまえたちは聞き入れなかった。だから今、彼の血の報いを受けているのだ。』」

ルベンは長男でヨセフに危害を加えることに反対したのであったが、彼のことばは、彼らの過去の罪の深刻さを改めて認めさせるものであった。「彼の血の報い」とは無実のヨセフを殺してしまったと思うがゆえに受ける痛み、苦しみのこと。

[23] 彼らは自分たちがヘブル人で自分たちの国のことばでしゃべっているのに、周りにエジプト人がいても理解していないだろうと思っていた。しかし、ヨセフはちゃんとそれを聞いていたのである。普段は両者の間では通訳者を通して会話をしていたので、すぐそばにいる権力者である人物が、全部聞いてわかっていたとは思わなかったのである。

[24] ヨセフは兄たちの後悔の思いを聞き、激しく心動かされて、彼らのそばからしばらく離れて、泣いた。ここには兄たちに対する怒りや冷たさは見られない。そして彼は戻って来て兄弟の中からシメオンを捕えて彼らの目の前で縛った。彼だけ引き続き監禁して、他の兄弟たちを帰すためである。シメオンが選ばれたのは彼がかつて、ヨセフを捕え、苦しめるのに積極的な役割を果たした人物であったからかもしれない。

[25]「ヨセフは彼らの袋に穀物を満たし、それぞれの袋に彼らの銀を戻し、さらに道中の食料を与えるように命じた。それで、人々はそのとおりにした」

穀物の袋に代金の銀を返すということは兄弟たちの気持ちを混乱させるだろ

うということはヨセフもわかっていただろう。しかし、これらのことは彼の善意の現われであったのであろう。

[26-28] カナンへの帰り道、彼らのうちの一人が宿泊所で自分のろばに飼料をやるうとして袋を開けると、なんと袋の口に自分の銀があった。それで一同は驚き恐れて互いに言った。「神は私たちにいったい何をなされたのだろうか」(28) これは彼らがスパイ扱いされていたのに、なおその上、盗みの疑いをかけられるのではないかということをおそれたゆえのことばであろう。しかし、彼らはこの出来事が神によって起こったことであると理解している。今まで彼らが信仰者らしい発言をしているのを聞いたことがないが、やはり、彼らの心の底にはアブラハム、イサク、ヤコブと続いてきた神への信仰が受け継がれ生きていたのだと思わされる。

[29-34] こうして彼らはカナンの地にいる父ヤコブのもとに帰り、エジプトで起こったことのすべてを父に告げた。彼らは父が受けるショックをなるべく少なくしようとして三日間の監禁のことや、一人の袋に銀が返されていしたことなどは伝えなかった。

[35] 父への報告を終えて、彼らが自分たちの袋から買ってきたすべての穀物を出して空にすると、何と代金の銀の包みが全員の袋の中にあった。銀が入っていたのは一人ではなく全員であったのである。彼らも父もこの銀の包みを見て恐れ狼狽した。彼らはここに明らかに何者かのたくらみを感じたであろう。

[36] 「父ヤコブは言った。『おまえたちは、すでに私に子を失わせた。ヨセフはいなくなり、シメオンもいなくなった。そして今、ベニヤミンまで取ろうとしている。こんなことがみな、私に降りかかって来たのだ。』」

ヤコブ自身、彼の前にいる子らが、すべての不幸の原因であると思ったわけではないであろう。しかし、かつてヨセフがいなくなったときの状況から来る長年の不信感と母リベカの死に目にも会えず、また最愛の妻ラケルを失ったことや、その他今回の出来事などがあって自己憐憫に陥り、このようなことを言ったのであろう。ヨセフについての真実を知る兄たちにとってはこのヤコブのことばは極めて厳しく響いたであろう。

[37-38] ルベンが自分が長男であることの自覚から、ベニヤミンに対する補償を自分の子どもたちのいのちにかけてするが、父はそれを受け入れることをしない。ルベンの二人の子を殺すなど、ヤコブにとってまともに聞けるようなことではないし、ベニヤミンにもしものことがあれば、

「道中で、もし彼にわざわいが降りかかれば、おまえたちは、この白髪頭の私を、悲しみながらよみに下らせることになるのだ」と彼は末子ベニヤミンに対して強い愛着を示す。

「よみ」は死者の行く所のこと。

二十年間離れていたヨセフと兄たちは世界中を襲った大飢饉のゆえに不思議な形で再会することになった。片やエジプトの権力者、宰相、片やカナンの地の羊飼いたち。ヨセフは兄たちに荒々しく語るが、兄たちは全く気がつかない。彼らはエジプトに来てヨセフを伏し拝んだことにより、彼が十七歳の時に見た夢が実現したのである。神はヨセフをただ苦しめ、悩ますためにエジプトに送り、奴隸として牢獄で苦しい経験をさせたのではなかった。それは今日あるようにヨセフがエジプトでファラオに次ぐ第二の権力者となり、イスラエルの一族を救い、保護し、神を中心とする国家として発展させるためであったのである。神はまずヨセフの兄たちをエジプトに導いた。そこで彼らは自分たちの罪咎を思い返し、神を恐れ、神に従う者として整えられなければならなかった。そしてその後に、ヨセフとの和解の時が来るのである。長い何月がかかっているようであるが、すべては神のご計画どおりに進んでいく。そして、やがてこのイスラエル民族を通して、救い主イエス・キリストが人となってこの世に来られるのである。

兄たちにとって見知らぬエジプトの権力者が実は彼らとその一族を救う力を持つヨセフであったように、私たちにとってイエス・キリストもかつては自分たちとは無関係で見知らぬお方であったが、彼こそ私たちを罪と死と滅びから救い、永遠のいのちと豊かな人生を与えてくださることのできるまことの神、まことの救い主なのである。→ヨハネ3：16、エペソ2：1～5